B 13 肺癌切除例における血管浸潤、増殖細胞核抗原 (PCNA) の検討

国立療養所東京病院外科¹⁾, 同病理²⁾, 東京医科大学外科³⁾

宮島邦治^{1) 3)}, 小松彦太郎¹⁾, 福島 鼎¹⁾, 相良勇三¹⁾,
白石裕治¹⁾, 江連雅彦¹⁾, 片山 透¹⁾, 蛇沢 晶²⁾,
小中千守³⁾, 加藤 治文³⁾

【目的】 肺癌切除例における血管浸潤、PCNA発現と予後の関連について検討した。

【対象および方法】 肺癌切除例242例を対象にした。ホルマリン固定パラフィン包埋材料を用いElastica von Gieson染色で腫瘍組織の血管浸潤の有無を、またモノクローナル抗体を用いABC法にて陽性細胞の発現率を調べ予後、病理組織分化度、術後病期との関連を検討した。

【結果】 血管浸潤陰性例 (91例) は、陽性例 (151例) に比較して有意に予後が良かった。またPCNA陽性細胞が25%未満の症例 (131例) は、25%以上の症例 (88例) に比較して有意に予後が良かった。PCNA陽性細胞が25%未満の症例のうち、血管浸潤陰性例 (60例) は、陽性例 (81例) に比較して有意に予後が良かった。病理組織分化度は、血管浸潤陰性例では高分化型が多く、血管浸潤陽性例では低分化型が多くカイ二乗検定で危険率1%で有意であった。術後病期は、血管浸潤と進行度とがカイ二乗検定で危険率1%で有意であった。

【結論】 血管浸潤の有無、PCNA陽性細胞の多寡は、予後因子として有用であると考えられた。また血管浸潤の有無は、病理組織分化度、術後病期と有意な相関がみられた。

B 15 肺腺癌におけるTGF- β と癌遺伝子の発現に関する研究

滋賀医科大学第2外科, 第2解剖*

朝倉庄志, 加藤弘文, 藤野昇三, 榎堀 徹, 小西孝明,
浅田佳邦, 森 渥視, 桂 敦史*

【目的】 Transforming growth factor- β (TGF- β) による癌細胞の増殖抑制機構の一つに、TGF- β によるc-myc遺伝子の発現抑制があると考えられている。また、c-mycの発現抑制においてp53などの癌抑制遺伝子の関与が示唆されるようになってきている。我々は肺腺癌におけるTGF- β とp53およびc-mycの働きとそれぞれの相関について免疫組織学的に検討した。

【対象と方法】 当科で切除術を施行されたT1肺腺癌症例39例を対象とした。病期はI期27例、II期2例、III A期4例、III B期1例、IV期5例であった。実験方法は原発巣のパラフィン切片に対して、LSAB法を用いて免疫組織染色を行い、TGF- β 、p53ならびにc-mycの腫瘍組織内での発現と局在について検索した。

【結果】 腫瘍組織内でのTGF- β 陽性例は39例中23例であった。TGF- β 陽性例に中心部線維化巣が出現する頻度が高かった。p53蛋白陽性例は11例であった。c-myc蛋白陽性例は24例であった。TGF- β 陽性例23例のうちp53蛋白陽性例は9例、c-myc蛋白陽性例は17例であった。TGF- β とc-mycの発現が相関する可能性が示唆されたが、両者の発現が予後に及ぼす影響を確認するには至らなかった。

B 14 肺癌患者血清中のsoluble E-selectin (sEs) 値の検討

防衛医科大学第2外科

妻島元太郎, 尾関雄一, 高木啓吾, 出口博之,
青木輝浩, 渡辺真純, 田中 勸, 尾形利郎

【目的】 E-selectinはシアリルLe^x(SLX)やシアリルLe^a(CA19-9)をリガンドとする細胞接着分子である。別名ELAM-1とも呼ばれIL-1やTNFで刺激された血管内皮に特異的に発現し、血中へ放出されsEsとなる。他の細胞接着分子同様、癌の転移機序への関連が想定されているが臨床例での十分な検討はなされていない。我々は肺癌患者血清中のsEs値を測定し、E-selectinと転移との関連について検討した。

【対象】 肺癌症例25例。臨床病期I期9例、II期4例、III A期4例、III B期3例、IV期5例。

【方法】 British Bio-technology社のsEs ELISA kitを用いた。

【結果】 入院時sEs値はTNM各因子、病期、組織型別で有意差を認めなかった。術後sEs値を測定しえた13例のうち高値であった5例中4例(80%)にpmや術後の遠隔転移を認めたが、正常値であった8例中の遠隔転移は1例のみ(12.5%)であった。術後sEs値が高値の転移例では全例で術前のSLXまたはCA19-9値が高値であった。肺癌の遠隔転移にE-selectinを介する細胞接着分子が関係している可能性及びsEs値測定が臨床上何らかの意義を有する可能性が示唆された。

B 16 Clinical Analysis of Completion Pneumonectomy -Report of 11 cases-

Department of Thoracic Surgery, National Medical Center Seoul, Korea

○Yong Hur, M.D., Jung Ho Lee, M.D., Hoe Sung Yu, M.D.

Among eleven consecutive cases having undergone Completion Pneumonectomy (CP) between Oct. 1958 and Aug. 1993 at the Dep. of Thoracic & Cardiovascular Surgery in National Medical Center, Seoul, Korea.

The patient's mean age was 43 years (range 28yrs. to 68yrs.), & they consisted with 10 males and 1 female. The indication for CP were benign diseases in 9 cases & 2 cases of lung cancer. The mean interval between the first operation & CP was 62.3 months (from 17days to 288 months).

The several intraoperative procedures such as intrapericardial pulmonary vessel division & suture ligation, reinforcement of bronchial stump margin, & the Fibrin glue & hemostatics were performed.

The mean intraoperative bleeding was 3582 ml. (1500ml to 6500 ml)

The post operative complication were developed in 5 cases (45.5%). they were empyema with BPF in 2 cases, empyema in 2 cases, & 1 cases of respiratory insufficiency which leading to death.

We concluded that the CP noted high morbidity & mortality compared with ordinary first pulmonary resectional surgery.

But, it will be a challenge to improved the morbidity because of increasing trend of completion pneumonectomy in a future time.